

---

# 神への挑戦

メフィスト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神への挑戦

### 【Nコード】

N8103C

### 【作者名】

メフィスト

### 【あらすじ】

「俺は神を倒す！」そう豪語する少年「トライ」が幼馴染の「エレン」と共に神の軍勢ファントムゴッドと最強の戦士達リトルゴッドを力を合わせ倒す戦闘ファンタジー！！

## プロローグ

「俺は神になる！」

こんな他人が聞いたら耳を疑う発言をしているのは、赤い瞳に赤い髪そして赤い服を着ている全身赤で彩られた顔にあどけなさが残る少年だった。

「何回言ったらわかるのトライ。いくら長年魔法と剣の修練を積んだとはいえ、神になうはずないでしょ」

呆れた顔で切り返すのは白い服を着ている艶のある白髪の少女。

「いゝやエレナ。俺は神にも負けないね！　なんてたってあのニケ家の子供だからな！」

ニケ家とはこの国で一番強い騎士の家系で、この家系の者はみな稀有な才能に恵まれているという。そして先祖のレクイエム・グラウンド・ニケはなんと初代のリトルゴッドに入るほどの力の持ち主で、リトルゴッドのNO4をまかされていたという。

「馬鹿ねえ。神様には44名の精鋭のみで作られたファントムゴッド部隊が13もあるのよ！　しかもその部隊の全員の上を行くリトルゴッドというトップ4の戦士がいるのよ」

リトルゴッドは現在100代目だといわれていて、昔からNO1〜NO4までありNO4がリトルゴッドで最強の者とされている。

これはそこらへんの一般市民でも知る当たり前の常識で、トライ自身ももちろん知っている。

「それがどうしたんだ？　この炎と……」

トライの手から黒い炎が噴出す。

「この<炎魔>があるかぎり俺は無敵だ！」

トライは高らかに宣言する。<炎魔>とはニケ家の宝刀で、トライの先祖のレクイエム・グラウンド・ニケが自ら制作し魔力を込めた魔剣である。

「それはそうだけど」

実際エレナはトライが黒炎の魔法と炎魔を手にしてから無敗記録更新中なのを知っている。

だが、エレナはリトルゴツドの強さも知っている、おそらく今のトライではとうてい太刀打ちできないだろう。ここは絶対止めなければいけない。

「いくらトライがこれまで無敗だとしても神はおろかりトルゴツドたちにさえも敵わないよ！」

これまでの部分をエレナは強調する。

「しかもどうやって神と戦うというの？ 私たち少しは身分が高いけれど、神といつでも対面できるわけでもないし会ってすぐに切りかかっても、リトルゴツド達に取り押さえられてすぐ公開処刑だよ！」

エレナは機関銃のように説得の言葉をトライに打ち込む。これで納得してくればいいのだがと祈りつつもトライのほうを見ると。

「それもそうなんだよな〜」

なんと何がおこったのかトライは頭を抱えて真剣に考え込んでいる。しめた！とばかりにエレナが説得を続けようとしたが、いきなりトライはぱつと顔を輝かせて……

「そうだよ！ ということは今の實力じゃ無理っていうことで、俺がもっと強くなればいいんだ！」

「え〜〜！ まあ間違っではないないし確実な方法だけれど時間がかつちやうと思うよ……」

エレナは反論するがトライはもう聞いていない、集中すると他の事が目に入らなくなるっていうか、なんというか。

まあ遠回りだけど死地へ送り出さなくてすんだし、結果オーライかな。

「そうと決まれば修練場へいくぞエレナ。速く強くなって神に匹敵するための第一歩は、修練場のマスターを倒すことだ！」

エレナの心配をよそにトライは修練場へ駆けていく。

「ま、まま、まちなさーい！！人の話は最後まで聞けー！」

叫びながらもエレナもトライの後を追う。こうしてトライの打倒神！への挑戦が始まった。

-----

時を同じくして神の間では、青年が玉座に座っている。

青年は赤い瞳に赤い髪そして黒い服を着ている。

リトルゴツドの一人、諜報部をたばねる男が青年の近くに寄ってきて跪き。告げた。

「神。この国に神を倒すと豪語している少年がいるとの情報が入りましたが、いかがなさいますか？」

神と呼ばれた青年は感情を持たずに告げる。

「・・・少年は何歳だ？」

「14でございます。」

神は少し考える素振りをし、男に告げた。

「反乱分子は根絶やしだ。といたいところだが、所詮は餓鬼だ。なにもできやせん。報告こくろうグラス」

「はっ！」

諜報部をたばねるグラスと呼ばれた男は敬礼をしそのままリトルゴツドの中にくわる。

神は少し自分の決断に違和感を感じた。だがそれをすぐにふりはらい強国ポセイドンを打ち払う策を練ることに集中した。

これが自分の運命を分けた決断だと知らずに。

## 第一話強さを求める少年

太陽の光も届かない暗い路地の中に青い髪をしている綺麗な顔立ちの少年が立っていた。

少年は真ん中に黒い十字架がでかかとプリントされている膝までのびている白い服を着ていた。少年は虚空にむかって呟く。

「なあ……いつになったら僕は強きものになれるんだ。答えてくれよ。」

だがもちろんその答えは返ってこない。

少年は残念そうな顔をして歩き出そうとすると、前方にたくましい体をした男達が見えた。

こんな時間帯にここをうろついているということはおそらく傭兵になろうにも根性がなく器用なことでもできないくらいでなしだろう。

少年は常に路地で生き抜いているからこういう類の人間によくかわす。だが何度見ても気分が悪くなる。

少年はできるだけ男達を無視して路地から出ようとしたが……

「おい！ あそこに身なりのいい餓鬼がいるぞ！！」

「本当だ！ 絶好の力モだな」

「今日はなんの収穫もなく路地をブラブラして過ごすと思ったぜ！」  
大声で言葉を交わしながら男達がこちらへ向かってくる。

少年は嫌悪感いっぱい顔で言う。

「あなたたちじゃ僕の相手にならないよ。つかかってくるだけ無駄だと思うんだけど？」

唐突な強気発言に男達はぼかんとしていたが、言葉の意味がしだいにわかってきて男達の顔がみるみる赤くなってゆく。あまりの怒りにリーダー格らしき人物が吠える。

「ああ！！ てめえ自分の置かれた状況がわかってんのか？」

「ああわかってるよ。威勢だけの男達が3〜4人程群れて僕の前

にいる。ちがうかい？」

少年はしれつと言り返す。すると我慢しかねたのか群れの中の一人が口から唾を撒き散らしながら殴りかかってきた。

少年はそれをバックステップでかわした後、両手を前に突き出すとどこからともなく水がでてきて少年の両手に集束しナイフへと変形、少年は再度殴りかかってきた男の足にナイフを一本ずつ投げつける。二本のナイフは風を切り飛んでゆき男の両足にめり込む。

「水から構成されたナイフをくらったのは始めて？ ずいぶん痛そうだね」

男は悲鳴をあげながらうずくまっている。どうやら痛みあまり口もきけないようだ。

「やはりあなたたちじゃ役不足だな。でなおしてよ」

踵を返して少年が立ち去ろうとしたら、仲間を傷つけられた男達があか喚きながら少年にむかって自分達の持つそれぞれの得物を投げつけた。

「はあ、こりない人たちだね」

男達を背に少年はあきれた顔をして手を頭上にかざす。すると地面がひび割れ割れ目から水が噴出して形をつくり水の盾を少年の背後に作り出した。

男達の得物は水の盾に阻まれて少年までは届かなかった。少年が掌を返すと水の盾が砕け無数の水のナイフが飛び散った。ナイフはものすごく早さで飛んでゆき男達全員の目の前で急停止した。

「本当は脳天を貫いてあげてもいいんだけど……やめておいてあげるよ」

にこにこしながら怖いことを言う少年はショックで失禁して気を失っている男達を背に路地から出る。路地にいてもあの程度のレベルの奴等としか戦えない。

これじゃあ自分のレベルがあがるどころが下がってしまう。どうしたらいいんだろう……。

そうだ！！そういえば昔父上から「エンドタウン」という国にある

修練場という名の強者が集う酒場があると聞いたんだ！気になつて調べてみたら夕陽の沈む方向にあると地図に記述してあった。まったくなんで今まで思い出せなかったんだらう僕は！速くそこへむかわなければ！

こうして少年は水がパンパンに詰まった特大の皮袋と非常食を水の魔法で創った入れ物に詰め込み出発への準備をする。山に沈みかけている夕陽を目を細めながら見る。

「やっぱり夕陽はいつ見ても綺麗なんだよな」

少年はそう呟きながら修練場への道を歩き出す。

「目指すは<エンドタウン>だ！絶対強くなつてやるぞー！」

少年タナトスは大きな声で叫んだ。

これはトライが神を倒すと宣言する10年前の話。

## 第二話マスターとの死闘

まったくあいっつたらすぐ周りが見えなくなるんだから。

エレナはそう思いつつ修練場への道を焦らずにゆったりと歩いていた。

すると修練場が見えてきた。目標が見えたからなのかエレナは小走りになる。

修練場の前で誰かが話し合っている。少し気になったのでさらに近づいていくと、修練場の前で話し合っているのは背の高い男とトライだということがわかった。

なごやかにお話……というわけではなさそうだ。男の目つきがだんだん険悪になっていくのが私にもわかる。

男とトライが激突しそうなものにもかかわらず、遠くから微笑みなつつエレナは見守るだけだった。

男は我慢しかねたのか懐から深々と刺したら肝臓まで届きそうな長さのナイフを取りだし、ノーモーションで下からそれを振り上げる。トライは紙一重でそれをかわし体重を乗せた裏拳を相手のこめかみに打ち込む。

すんでのところではやがんで男はそれをかわしたがトライの追撃の蹴りが男のみぞおちに入り、男は紙切れのように吹っ飛んでいき、地面に叩きつけられる。

トライは男が失神しているのがわかってるので、男のほうには目もくれずにエレナの方へ駆けてきた。

「エレナ。いつからそんなとこにいたんだ？」

「トライの戦いを観戦してたのよ。それより、どうしてこんなことになったの？」

ほんとうは気づいていたくせに。内心ふくれながらエレナは聞く。「いやあ、自分は強いつてずっと豪語している奴で、思わず喧嘩を売ってしまったんだよ。それにしても……」

弱い奴だったなあ。そう言ってトライはにこつと笑う。

「よし！ エレナも来たし、修練所に入るぞー！」

「え？ ちょっと自分で走れるわよー」

トライはエレナの手を引つ張って修練場の中へ入る。修練場の中には傭兵あがりの男達やただ酒を飲みに来た男達がひしめいていた。男達は入ってきた二人に無関心な視線を送るがまた各自の話に戻る。エレナはいつ来てもこの修練場の酒と中年男の体臭が混ざり合ったかのような臭いが嫌いで何度嗅いでもこの臭いは慣れない。

「マスター。ちょっと話があるんだけど」

トライはカウンターに向かって叫ぶ。修練場の空気がこころなしかピンと張りつめている気がする。

マスターと呼ばれた無精髭をばさばさにはやした中年の男が目線をつとあげてトライを捕らへ、静かに答える。

「何の用だ小僧」

エレナはマスターの声を聞くのはこれが初めてではないが、鳥肌が立ち足元から恐怖が這い上がるような声で、いつ聞いてもゾツとする。本当にトライはこの人と戦うというのだろうか。

「単刀直入に言うけど、俺と勝負してくれないか？」

「無理だ」

マスターがあまりにも即答だったのでトライは面食らってしまった。ただどひるまずに言い返す。

「何故だ？」

「小僧と戦っても勝敗が見えすぎているからな」

「どうやらマスターは即答が好きなようだ・・・じゃなくって！」

「へー、俺と戦うのが怖いのか？」

心の中で一人ノリ突っ込みをしているエレナをよそに話は続く。「安い挑発だが、まあいい。修練場のマスターが小僧に戦いを挑まれて逃げたなんて噂になったら困る。表にでてもらおうか」

「言われなくとも出るさ」

「ちょ、ちょっと！ いいの？ 相手はあのマスターよー！」

トライは私にむかってまたにこつと笑い言う。

「心配すんなエレナ。なるようになるさ」

マスターが修練場から出る。トライ達も出る。

ちよつどいい決闘用のような草原がありマスターとトライは対峙した。ひゅーっつと風が吹きお決まりのように丸まった新聞紙が足元に転がる。エレナとその他のギャラリーの者達が緊張しながらみつめる。

トライが先に動く。

「炎よ！」

トライが叫び手を上げると頭上にサッカーボール大のおおきさの黒い炎が数十個出現する。行けというトライの掛け声とともに炎球がマスターにむかつて飛んでいく。

マスターが何も言わずに手を上げるとマスターの前方に巨大な闇が生まれてトライの炎球はそこへ吸い込まれてしまった。

「後ろ！」

マスターが叫びながら上段回し蹴りを後ろへ繰り出す。トライは意表をつかれたがそれをしゃがみかわしつつ剣を下から振り上げる。マスターは手に魔力を集中し剣を作り出しトライの刀を受け止める。ガガッ、キーン。剣がスパークし火花が舞う。

「なかなかの小僧だな」

「あんたこそ！」

トライは大きく後ろに跳躍し人差し指をマスターに向けると、指からものすごいスピードで黒い熱線を打ち出す。それはマスターの顔面に直撃したかに見えたが……。ばしゅっつという音とともに熱線が掻き消えた。トライは一瞬あつげにとられた顔をしたがすぐに立ち直りすごい速さでマスターの懐に飛び込み剣を突き上げる。

マスターは余裕の表情でそれをかわし胸のまえで十字を切ると……

……

「ぐっ！！！」

トライがものすごい勢いで吹っ飛んだ。トライは体制を立て直すべく空中で一回転し体をひねり地面に着地する。

マスターがまたもや自分の胸の前で十字を切る。するとそれがトライに見えた。

すんでのところで黒炎の盾を目の前に出現させそれを防ぐ。

「あんだ。そんな種バレバレの攻撃はやめたほうがいい。だがとりあえずあんたの実力は見切ったよ」

「ふん……」

マスターは十字を胸の前で三度切る。黒い小さな十字架が眼には映らないほどの速さでトライにむかつていく。

「はっ！」

トライの剣が全ての十字架を叩き落す。黒い十字架はばしゅっつという音とともに消滅した。さっき熱線が聞かなかったのは奴がこれを額に出現させたからか……

「お前の負けだマスター！」

トライは手の平を地面にあてて叫ぶ！するとマスターの足元が裂け黒い炎が噴き出され爆発した。

マスターが両手を前に出すと巨大な闇ができて爆発を包み込む。マスターの背後にはすでにトライがいて後頭部に熱線を打ち込む……が、またばしゅっつという音がして掻き消された。がそれは誘導で本命の剣を突き出す。

剣はマスターをあっけなく貫通する。マスターは苦悶の表情を顔に浮かべると、ふっと風に吹かれたかのように消えてしまった。

！！！！

「こっちだ」

いつの間にか背後にいたマスターがものすごい速さで胸の前で十字を切ると、トライが吹っ飛ぶ。追撃が続き今度は小さな黒い剣が無数に乱れ飛んでくる。トライは無理な体勢からそれを受け流していたのだが、ついに受け切れず全身に黒い剣が突き刺さる。

「ぐああ……」

マスターは掌から巨大な黒い十字架を出しトライへ投げつける・  
・・・!!

トライの目の前に巨大な黒十字架が迫ってくる・・・・。

「避けてトライ!!」

エレナの声が遠くから聞こえた。しかたがないな。

「こんなところで使うのもなんだが・・・・封印を1つ解除するか・・・・」

トライは呟き胸に手をあてる。

### 第三話封印解除

「封印解除……壹式！」

トライの足元から黒い火柱があがりトライを包み込む。黒い十字架は火柱の熱で跡形もなくなる。

「あ、そうだったわ。トライにはこれがあつたわね」

エレナはホツと胸を撫で下ろしながら独り言を呟いた。とりあえずあいつがこの状態になったらもう勝ちね。

戦闘前の不安はどこえやら。エレナは微笑みながらトライを見ていた。

――

「もう終わりだよマスター」

マスターは素早く振り向く。そこには黒い瞳、そして黒い髪の少年が立っていた。

「この状態になったら……もう貴方は勝てない」

びしゅっ！！マスターの体から小さな黒い剣が無数に飛び出してきた。

「悪あがきはよしたほうがいい」

トライは片腕がブレる……手を開くとジャラジャラと無数の剣が落ちてきた。手に怪我はしていない。

「これは警告だよ。よしたほうがいい」

「ぬかせ小僧！ここで負けてたまるか！ギア・ダーク！」

マスターは叫び地面を蹴る。するとたんにマスターが消えた。すくなくともエレナとトライ以外にはそう見えていただろう。だがトライとエレナには見えている。

超高速で動くマスターの後ろに、トライが移動する。マスターはものすごく意表をつかれたようだが、あえて表に出さず冷静にスピードを一段階速めた。

「段々速くなる呪文なんですね。速くなりすぎると厄介です。ケリをつけます」

トライは右手の指をパチンと鳴らす。するとトライの周辺に黒い炎の輪ができた。トライはパチンパチンと右手の指を小気味よく鳴らし続ける。

あつというまにトライの周りは黒い炎の輪でいっぱいになる。

「これぐらいでいいかな……」

トライは左手の指を頭上にかかげパチン！と盛大に鳴らす。

すると周りの炎の輪が爆発した。無数の黒い輪の中から炎球がギヤラリーに届かない程度に飛び散った。

「ぐあ……」

すると炎球が当たったのかマスターがどこからともなく現れた。

トライはすでにマスターの目の前に移動して顔の前に掌を突き出した。

「終わりです。降参してください」

「降参などする……」

そこでマスターの意識が途切れた。後頭部に手刀をくらったからだ。驚いてトライはマスターの後ろを見る。

「こんなに決定的な力の差があるのに負けを認めないなんてね。マスターともあろうものが」

そこにはでかかど黒い十字架がプリントされている白い服を着ている青い髪の少女がいた。

「ねえ君すごい腕だね。今度僕と手合わせしてくれないかな？」

トライはもう赤い服に戻っている。トライは少し警戒して言う。

「おまえ誰だ？手合わせなら今でもいいぞ」

「いやちよつとここではできない理由があつてね……後で戦うために少しの間一緒に行動してもいいかな？」

そういうと少女はにっこりと微笑む。結構綺麗な顔立ちである。

「まったあ！ トライ！もしかしてこの子と一緒に行動を共にするなんていうんじゃないでしょうねえ！」

「ん？それもそうだなあ……」

トライはちらつと少女のほうを見る。少女は上目遣いでこつちをじゅつと小動物のような目で見ている。これは効く……しょうがないな。

「いいぞ……でも少しの間だけだからな！」

はあ、舌嚙んじやって……トライったら可愛い女の子の前に出るといつもこうなるんだから……というか本当にこの子もいっしょに来るの！？

「ありがとう」

少女はぺこつと頭を下げる。トライの顔は見えないほどとろけている。気晴らしにすねを蹴ってやった。

「くろうー！！ 何するんだよエレナ！」

「はいはい。とろけてないで行くわよ」

私達が行こうとすると後ろからつめき声が聞こえた。

「ま……待て……」

どうやらマスターが起きたようだ。

「お前は何者なんだ？俺に気配を感じさせずに背後に回りこみ失神させられるなんて……」

「人を気絶させるなんてたいしたことじゃないよ。ちょっと子供の頃父上に訓練を受けていたんだ」

「へー、小さい頃から訓練してたの？でもそれにしては顔も白いし手も柔らかい感じがするけど？」

エレナはなにかば感心して言う。

「それは、ちょっとわけあります」

少女はにこつと笑う。最初は不満タラタラだったエレナも少しづつこの少女が好きになってきた。

「そっぴやおまえ。名前はなんていうんだ？」

「デス・ジョーカー・サイズ。サイズって呼んでね」

「そっかサイズ。よろしくな」

サイズにむかって手を差し出す。サイズはそれを握ろうとしたけ

ど……エレナが阻止した。

「ねえ、握手はまた今度でいいでしょサイズ」

「それもそうですね」

サイズはちよつとだけ残念そうな顔をしたがまたにこつと笑う。みんなで雑談しているとき、黒いローブを羽織った男がマスターの傍らにいつのまにか立っていた。

「誰だ!?!?」

トライが叫ぶとサイズとエレナも自然と身構える。

「まあまあ、こいつは俺にようがあるんだよ小僧」

マスターが言うつと黒ローブはうなずく。

「彼からの伝言です」

その後の内容は声が小さすぎて聞こえなかった。ふと黒ローブはサイズのほうを見て一瞬びくつとする。が、すぐに明後日の方向をむく。

「少年」

黒ローブはトライに言う。

「君が彼を目標にしていることは知っている。その目標に少しでも近づきたいのなら……」

話の途中で黒ローブは消えてしまった。黒い手紙だけを残して。

黒ローブは今誰もいない森の中にいる。草木が生い茂り太陽の光を通さない。

それにしてもあの少女は何者だったんだろう。あのお方にそっくりだ。

だが一番気にかかるのはあの少年。強さを求めるのに貪欲なのはいいが、あの程度の実力で神に挑むのは無謀な気もする。何より神と戦う前にあのお方がいるのだから。

「君か」。僕の周りでこそそそしていた虫けらは

!?!?!!

黒ローブが振り返ると、目の前には……黒い髪、黒い瞳の男が

立っていた。

「何故ここがわかったんだ神！」

「え、僕に向かつてその口の聞き方はないでしょ。もし今「いつもの僕」だったらもう塵になってるよ」

くだけた口調だがその声には少し殺意がこもっている。神の眼がどンドン赤くなってゆく。

これではどうせすぐ塵にされるだろう。

黒ローブは覚悟し、一瞬で神の背後に回り、掌を神の後頭部に向けた瞬間！

「それは反乱だよね」

神は遙か彼方に移動していて遠くから黒ローブに向かって片手を突き出す。

「ま………まて！ 早まるな！」

「バイバイ」

神の手から強烈な光の洪水が噴出す。黒ローブは森とともに塵となった。

「……さて、我輩も帰るとするか」

神の黒い髪が赤くなり、黒い瞳も赤くなってゆく。

呪文を唱えると真っ赤な神は虚空に消えた。

## 第四話 砂漠の家

私達は何故こんなに暑いところにいるんだっけ？

心の中で何回同じことを唱えたことか。エレナとサイズはリュックを担いでのろのろと砂漠の中を歩いていた。

「それにしても<家>なんて見えないな」

トライは手をかざし太陽の光を防ぎつつ咳く。肌に玉のような汗が浮き出ている。

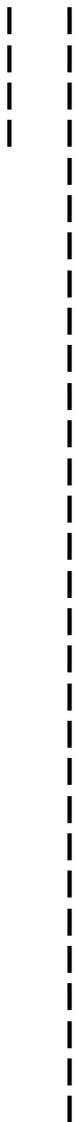
「そうよねー。もしかせてガセだったりして」

「でもわざわざ僕達をこまらせるためにこんなことするかなあ？」

トライの両脇にいるエレナとサイズが愚痴を言い合っている。

「いやでもマスターの知り合いがくれた手紙だし……」

そういつてトライは折りたたまれていた黒い手紙を開く。



地面に落ちている手紙をトライは拾い上げる。

「トライ君。なにが書いてあるの？」

「トライ。何が書いてあったの？」

すっかり仲良くなっているエレナとサイズが近づいてきて両脇から覗き込む。

「<砂漠の家>としか書いてないな。これじゃあよくわからない。」

「たしかにわからないわね。どこのさばくのかしら？」

「僕もちよつとわからないよ。どこにあるんだろっ？ ……あ！ト

ライ君」

トライが顔をそちらへ近づける。サイズは顔をにこつとさせてトライに咳く。

「トライ君。マスターに聞いてみるのがいいんじゃないの？」

「おお！ サイズって頭いいな」  
「へへっ」

サイズは恥ずかしそうに笑い頬がすこしだけ赤くなる。それを見ているエレナはちよつと気分が悪い。

「わかったんなら聞くよトライ！」

そう言うつとエレナはトライの手を引つ張り自分で歩けるつてというトライの声を無視してマスターの元へ連れて行く。地べたでだるそうに寝そべっているマスターがこちらを見る。

「マスター。ちよつと質問するんだけど、いいかな？」

「ああ」

相変わらずの即答だ。どんな状況でも即答ができるのではないだろうか。

「<砂漠の家>って何か知ってるかい？」

「エンドタウンのはずれにある<サビ>という名の砂漠にある家のことだ」

「ありがとう」

トライはそれだけ言つて踵を返す。

「ああ……1つ言い忘れていた」

三人はマスターのほうを振り返る。

「気をつける。<家>の住人は俺より強いという噂を聞いた」

「大丈夫。なるようになるさ」

トライはマスターにむかつてにこつと笑う。

――

「ふう。ちよつと疲れたよ。休憩しない？ 二人とも」

「そだな」

「それもいいわね」

サイズが手をかけげると指から水がほとばしり水のソファアが出る。上がる。

「すごいね。サイズちゃん」

「へへっ。それほどでもないよエレナさん。」

サイズは手を頭に置いてにこっと笑う。三人はどっかとソファ―に座り込む。

「もしかしたらサイズって水筒いらすだったりするの？ 水が創れるから」

「いえ、水を創るにも体力がいるから余計に力を使ってしまうんだ」「そうなの？」

「魔法の基本だよ〜」

四人で雑談していると、ソファ―がせまくなってしまふ。四人？「誰だ!？」

エレナとサイズは後ろに大きく跳躍しトライは<四人目>にむかって拳を突き出す、難なく掴まれてしまふ。

「ちよつと君たち気づくの遅いよ〜 もし僕が君達を始末しようと思つてたらとつくに始末されちゃってるよ〜」

軽く男が腕を振るとトライが空高く投げられてしまふ。トライは受身をとるが、そんなトライには目もくれず男はエレナとサイズに話しかける。

「やあ君達。こんな砂漠で会えたのは運命としかいいようがないよ。是非一緒に僕とお食事でもしないかい？」

こんなに堂々とナンパする男は見たことがない。しかもこんな砂漠のど真ん中で。

「君達そんな哀しい眼で僕を見ないでくれよ〜 こたえちゃうじゃないか〜」

とかいいつつ全然こたえたふうもなくにこにこしている。

「呼んでくれるのは嬉しいけど、僕は自分より強い人じゃないと好きになれないんだ」

「サイズちゃん。こんな人とかかわつちやだめよ〜」

「大丈夫！ 僕のほうが君等三人より強いからね〜 なんならここで証明しちゃってもいいよ〜」

男は軽く宣言する。

「何！？ ならやってみろ！」

トライはなんの躊躇もなく剣を男に突き出す。男は身をひねらせ剣を軽くかわしでこぴんをする。

するとトライは20メートル以上吹っ飛ばすが、体を一回転させな  
んなく着地する。

「思いつつきりいくよサイズちゃん！」

「はい！ エレナさん！」

エレナが片手を前に突き出すと突風が吹き男を木の葉のように弾  
き飛ばし、サイズが水の手裏剣を無数に投げつける。

「いやあ、女の子には反撃できないんだよね〜」

そういうと水の手裏剣が弾け飛んでただの水に変わる。サイズは  
ひるまず指をパチンと鳴らすと今度は巨大な手裏剣が無数に出来て  
飛んでいく。

「そんな遅いの当たるわけないじゃないか〜」

「そうとはかぎらないわよ」

エレナが再度突風を生み出すと、手裏剣が風のように飛んでゆき  
男に深く突き刺さる。

「やったあ〜。調子に乗ってるからよ！」

「初コンビ勝利！ タイミングはうちりですねエレナさん！」

二人で顔を合わせて親指を立てる。

「ちよつとやられたかな〜 まあ全然痛くないけどね」

！！！！

男はパンパンと服をたたくとにこつと笑う。

「そついえは君達には警告のために来たんだよ」

男は出し抜けに言う。

「なんだ？」

いつのまにか戻ってきたトライは言う。

「ここの近くにある<家>には近づかないほうがいいよ〜」

それだけ言うと男は消えてしまった。

「なんだっただんだあの男」

「本当になんだったんだろう」

「軽い男だったわね」

口々に印象を言い合いながら警告などなかったかのように三人は  
<家>をみつけるため砂漠をさまよう。

「あ！ あれじゃないの？」

エレナが指差した先には、みすばらしい家が1つ建っていた。

「よし、さっそくはいるぞ二人とも」

「うん」

「はい」

トライは扉を開ける。

「なんだこれは……」

「まるで南国だよ……」

「きれいね……」

そこには海が広がっていた。水を舐めてみると、しょっぱい。

「これは本当の海水だよ二人とも」

サイズはかなり驚いている。

「なんでわかるんだって聞きたいところだが、今はそれどころじゃないみたいだな」

トライがあごをしゃくるとその先にはさっきの男が海の上に浮いていてこちらをじっと見つめていた。

「話があるんだ！」

トライが叫ぶ。男はやれやれと肩をすくめた後言う。

「わかってるよ。僕と勝負したいんでしょ。あいつの招待をうけてきたはずだから強いはずだしね」

男が指をパチンと鳴らすと三人の目の前に真っ黒なドアが現れる。

「さあ、そのドアをくぐりなよ」

三人は顔を見合わせて、黒いドアの中へ入る。

「楽しませてくれるといいな」

男はクスクスと笑った後跡形もなく消えた。

## 第五話黒い世界での戦い

「真つ黒な景色ですね」

「そうとしかいいようがないわね」

三人がくぐった扉の先は、黒で出来ている世界だった。

黒い草でできている真つ黒な草原。真つ黒な月。そして薄暗い闇。景色はいいが、なんでいきなりこんなところに俺らはいらんだ？ 扉に入っただけのはずだが……」

振り返るともう扉はなく、黒い草原が広がっている。

「君達。ここがどこだかわからないようだねえ」

どこからともなく先程の男の声が聞こえてくる。

「どこにいるんだ！ お前は！」

「そうだよ！ 戦うんじゃないのかい!？」

「いやいやまちたまえよ君達い。まずは僕の話聞きこつよ。叫ぶトライ達を押しとめて男はかるく話し出す。

「これからは僕が作り出した子供の時の僕と少年の時の僕と戦ってもらつよ。それを倒せないようじゃ僕と戦う資格はないってこと」

「いやまて！だが俺は……」

「だめだめ！ 言いたいことはわかるけど、物事には順序つてもものがあるんだよ」

男のため息がどこからともなく聞こえてくる。

「それにしても、そんなのはいないぞ」

「三人でこんなところでなにをしているんですか？」

気がつくところメートルほど前に一人の8歳ぐらいの子供が立っていた。

「ほらね ああ、言い忘れたけど最初は一人で戦ってね。順々に戦

う人を増やす方向で頼むね。」

そういうと男の声はしなくなった。

「じゃあ俺がやる。」

トライがここぞとばかりに前に出る。

「いくのよトライ！」

「トライ君がんばれ〜！」

二人はいつのまにか遠くにいて声援を送っている。

「ふう、プレッシャーかかるな。」

「貴方が僕の稽古相手ですか？赤い髪……二ヶ家の人ですね。」

「知ってるなんて嬉しいね。戦ったことがあるのか？」

「はい。一度だけレクイエムという名の二ヶ家の男の人と戦いました。」

これは驚いた！なんとこの子供はこんな年齢で俺の先祖と一戦交えたのか……。

「で、どうなった？」

「それを話す必要はありません。貴方は僕に殺されるのだから。」

子供が言い終えた瞬間ブレて目の前に現れる。

「僕に勝てたら教えてあげてもいいですよ！」

そう叫びながら子供は拳をトライの顔へ突き出す。トライはそれを首をいなしてかわすが、いなしたところに子供の裏拳が炸裂する。裏拳をくらったトライは少しだけひるむがものすごい速さの上段回し蹴りを放つ。子供はしゃがんでそれを避けて足払いで軸足をか。体制を崩して中に舞うトライの腹に踵落しが叩き込まれる。

「ぐっ！」

トライ腹に強い衝撃を受けて地面に叩きつけられる。子供が反撃を避けるためバックステップをして距離をおく。

トライは瞬時に起き上がり<炎魔>を抜いて上から斬り付けるが、サイドステップでなんなくかわされ右ストレートが飛んでくる。

「ふう！」

トライが力を込めると、炎魔が燃え上がる。トライが右ストリートをしゃがんで避けてさつきとは比べ物にならないほどのスピードで剣を振り上げる。

「それは……！！ レクイエムが使っていた剣！」

子供はかるうじてそれをかわしたが肩に浅い傷を負ってしまふ。

「まだまだあ！」

トライがさらに力を込めると、炎魔を物凄い勢いの黒炎が包む。

「そんな年齢で剣の状態変化をできるなんて流石だね」

「余裕か？ すぐにその無表情崩してやるよ！」

「いや、ちよつと危ないからきつめにくらす！」

そういうと子供は懐から真っ白な紙を取り出して叫ぶ。

「汝我を救うべく現れたまえ！ サイクロプス！」

子供が叫んだ瞬間小さな白い紙の中から3、5mほどの大きさの巨人が現れた。

その巨人の目は1つしかないが、両腕の筋肉がトライほどの大きさである。手には物凄く巨大な棍棒を握っている。

「サイクロプスか……たしかにちよつときついな」

サイクロプスは体に似合わないスピードでトライに突進してゆき棍棒を振り下ろすが、バックステップでなんなくかわされる。

「だけどノ口すぎる」

トライがそう呟いた時横からナイフが物凄い速さで飛んでくる。

トライはすんでのところかわしたが頬に浅い切り傷ができる。

「サイクロプスは誘導かつ！！」

ナイフの飛んだ方向を見るとまた子供は紙を取り出して三つの首を持つ黒い巨大な犬を召還していた。

ブンッ！！

「ぐああ！！」

子供に気を取られていてサイクロプスの存在を一瞬忘れていたトライは後ろから巨大な棍棒で思いつき殴り飛ばされていた。

ちっ！ナイフを投げてそっちに意識を向かせるなんてな……。

「ああ！ トライ君！」

サイズは思いつきり飛ばされたトライを見て思わず声をあげる。

「大丈夫よサイズちゃん。トライは大丈夫……」

エレナはサイズを落ち着かせてはいるが自分もはらはらしながら遠くから見ていた。

「でもサイズちゃん考えてみてよ。トライにはあれがあるでしょ！」

「あ！ 封印解除ですね！」

「そう！ それさえできればもう勝ちよ！」

「そうよ、トライはまだ負けなないよね。エレナは心の中でそう思った。」

「ぐ……結構効いたな。肋骨が二、三本イッたか」

トライは何か立ち上がると胸に手を当てて呟く。

「これはしのごの言ってられないな。封印解除………壱式！」

黒い炎がトライを包み込む……と同時にサイクロプスとケルベロスが襲ってきた。

「遅い！」

トライのいる場所からものすごい火柱があがった。ケルベロスとサイクロプスは灰になっていた。

「ふう、封印を解除できるなんて予想外ですね。天才ですか？」

「この状態になったからにはケリをつけます」

真つ黒なトライがそう言うとき子供はすこし微笑………。

「わかった。僕も本気で行くとするよ！」

子供が叫ぶとき子供の目の前にいきなりもう一人同じ子供が現れていてもう一人の子供が指を鳴らすと二人の目の前に手裏剣が現れた。  
「いくよトリック！ パターン4だ！」

一人目が叫ぶとき二人目がこくつとつなずく。すると一瞬で2人も物凄い速さで同時に動き出す。

「そこです！」

トライが片腕を振ると大地が裂け黒炎が噴き出す。それを2人は

避けながら一人目が手裏剣を投げつける。

「炎よ」

手裏剣を炎が燃えつくしていると2人目が紙からサイクロプスを出している。

「ファイア・ブラスト！」

トライが叫ぶと手から巨大な黒炎が噴き出しサイクロプスを塵にする。

『召還！』

2人が同時に叫び別々の場所でケルベロスとサイクロプスを4体つつ召還させる。計8体のケルベロスとサイクロプスが八方から襲いかかって来る。

「ラチがあきませんね。しかたがないですか、アレをつかいます」

トライが呟くと6メートルほどの高さまでトライはジャンプする。

「これで最後です！ デスクロス！！」

空中でトライが手を地上に向けると黒い草原に真っ黒な炎の巨大な火柱が無数に上がり始めて、黒い草原は瞬く間に火の海になったが、すぐに消えた。

「サイズは……エレナがいるから大丈夫だろう」

トライは地面におりたつてサイズたちのところへいこうとしたが、目の前には大火傷を負ってはいるが生きている子供が2人立っていた。

「しびとすぎます。強いですね」

一人が指を鳴らすと巨大な剣が二つ出てくる。2人はそれをもつてトライへ突進していく！

「もうやめにすれば……」

トライは後ろから来た巨大な剣をギリギリのところかわした。トライは目を見開く。

「最初から三人に分身していたんですか……流石ですね」  
トライは呟くと哀しそうな顔をして言う。

「でも今度こそ……さようなら」

トライが盛大に指を鳴らすと黒い炎が爆発した。三人は灰になっ  
た。。。。。

「トライ〜!!! お疲れ様〜!!!」

「トライ君〜! 生きててよかった〜!」

エレナとサイズが一緒に走ってきて戻ったトライの胸に飛び込ん  
だ。

「おいおい。俺は負けないよ」

2人は目に少しだけ涙を浮かべて本当?というふうな目で見つめ  
てきた。いかん。。。。これはかなりくる。

「ああ! 本当さ!」

強がつて2人を離そうとしたら、また男の声が聞こえてきた。

「第一試験終了〜 戦い終わって間もないけど第二試験へ移るよ〜

」

三人の前に白い扉が現れた。

「ふう、やすませてはくれないようだな」

三人はその扉をくぐった。

## 第六話 白い世界での戦い

「今度はさっきとは対照的な真っ白ですね」

「本当よね」

「こういう景色は和むな」

三人がくぐったところは雪が降り積もる真っ白な世界だった。

白い木々が延々と続いている森の中で三人はそれぞれ景色に見とれていた。

「でも森の中しけっこうじめじめしてるから戦いにくそうだな」

トライが思い出したかのように言う。

「私の魔法があればどこでも同じよ」。地形にとらわれないのよ」

「たしかにそうですね」

エレナが自慢げに言いサイズはうんうんと頷いている。

「あ！　そういうえばトライ君。肋骨は大丈夫？」

「大丈夫だ……」

「だめだよ！　骨折をほっとしていたら大変なことになるんだよ！」

そういうとサイズは手をかざしてゼリー状の肋骨を作る。

「じゃあ、入れるよ。ちよつと痛いけど耐えてね」

サイズはトライの口の中にゼリー状の肋骨を無理矢理押し込む。

「ぐぼっ……！」

「サイズちゃんトライを窒息させる気！？」

喉にいきなりゼリーのようなものを詰め込まれて苦しそうにして

いるトライを見て流石にエレナも心配になってきた。

「大丈夫ですよエレナさん………大丈夫ですよ」

「間が長いわよ！」

そうこうしているうちにトライはなんとか飲み込んだらしくはあはあ息を切らしていた。

「こうするってはじめから言えよサイズ！」

「いやあ、だって言ったらトライ君嫌がるんじゃない？」

それもそうだ。でも心の準備も必要だよな……なんて女々しくて  
言えないぜ。

「あ！ でも万能じゃないからちゃんと休んでね。衝撃を与えると  
水が破裂して激痛だからね」

「ここにこしながら怖いことを言うサイズ。」

「エレナ……サイズって意外と黒いな」

「うん……」

「なんか言いましたか？二人とも」

「ひいつ！ここにこしてるけど目が笑っていない……」

「楽しそうなところ悪いけど、相手が来たみたいだよ」

「今度もどこからともなく男の声が聞こえてくる。」

「ちつ！ 何でそれを言うかなあお前は！」

「いきなり少年が木の影から現れた。」

「い……い……いつからいたんだお前は！」

「トライは知らぬ間に叫んでいた。そこにいたのがまったくいつ  
ていいほどわからなかったからだ。」

「ん？ 誰だお前？ お前らがここにきてからずっとだぞ。鈍いな  
お前」

「お前」

「なんだとつ！」

「まあ、まあまあ、喧嘩はよそうよ2人とも」

「男の声が2人をなだめる。」

「そうよ！ 喧嘩しにきたんじゃないでしょトライ！」

「そうだよトライ君。ここは僕らにまかせてよ！」

「サイズとエレナがトライの前にずいっと出る。すると少年は……」

「な……なんて可愛いんだ君達は！」

「……！」

「ああ、その艶のある白髪、その服の上からでもわかる豊満な胸、  
すらつとした腰！ なにをとつても一級品ではないかね！」

「昔から軽い男だったのね……」

「エレナは呆れながら小声で呟く。」

「それにその綺麗な青い髪の君！」

「ぼ……僕？」

いきなり指を指されて少し驚いたサイズが答える。

「ああ、その流れるような青い髪！ 小ぶりな胸！ すらっとした脚！ 端正な顔立ち！ 見ているだけで目の保養になるよ」

サイズは誰の目から見てもわかるような嫌悪の表情を浮かべているが少年は気づきもしないで続ける。

「まさに僕好みだよ！ 一緒に2人とも僕のものになってくれないかね！！」

少年は演説を終えた後期待の眼差しで2人を見つめる。

『死んでもイヤっ！！』

そう言ったとたんエレナとサイズは思いっきり少年を利き腕でブン殴る。

「がはっ！！」

少年は吹き飛ばされて遠くの木に叩きつけられる。

「うーん、積極的な子達だなあ」

少年は呟いた後軽く起き上がると高々と跳躍して木々の中に隠れる。

「あいつは女の敵よサイズちゃん！ 私達がしとめる！」

「合点了解です！！」

サイズが水で武器を削っていく。

「吹っ飛ばせ軽薄野郎！！」

エレナがすごい剣幕で叫んで両の手を合わせると、物凄い風がエレナから吹き出してきた。

「いけー エレナさん」

サイズが声援を送るとますます風が強くなり木が軋みだす。

「うわお……ちょっと危ない子だねえ」

少年がそう呟いたとたん木々が根こそぎ吹っ飛んでくる。

「危なっ！！」

少年は叫びながら雪の中に潜る。

「くそっ！ 逃げられちゃったわね〜」

「エレナさん！ 武器創り終えました！ 武器の名前を言えば出てきます」

サイズがにこにこしながら言う。

「ありがとう！ サイズちゃん」

エレナはそう言うと腕を下から振り上げる。

「出て来い軽薄！」

すると地面が持ち上がり少年と土が一緒に下から飛び出してきた。

「軽薄はないよね、軽薄は〜」

少年が空中で体勢をととのえながら眩く。

「そこだよっ！」

サイズが少年にむかってナイフを二本三本と投げつける。

「ふっ！ 甘いよ〜！」

少年はそう言うつと素手で全部掴み投げ返してきた。

エレナが指を鳴らすと上昇気流が出来上がりナイフが上に吹っ飛ばす。

「うわお！」

少年が着地した後上を見ているとザクザクと大きな鎌が少年に突き刺さる。

「やったー」

サイズがにこにこしながら言う。

「いや待ってサイズちゃん。あの人血が出てないわ」

冷静にエレナが言うつと少年が地面から飛び出てくる。

「うっん、ナイスなアイデアだけれどそんなんじゃないあ僕は倒せないよ〜！」

少年はどこから出したのか二丁拳銃を構える。

「いやあ、こんな近い近くに来てくれるなんて僕は嬉しいよ」

いつのまにか接近していたサイズが身の丈ほどのある巨大なチェインソーを持っている。

「ミンチになつて軽薄さん」

エンジンがかかったチェーンソーが少年に迫る。

「だから軽薄はないよね軽薄は〜」

少年がそう言つとチェーンソーは粉々になりサイズが吹っ飛ぶ。

「風よ!」

エレナが叫ぶと風力でサイズはゆっくりと地面に着地する。

「あ……ありがとうございます!」

「礼なんていいわよ。……それよりあいつ、強いわね」

エレナは呟きながら風で少年を吹き飛ばそうとするが、少年はにこにこ笑いながら近づいてくる。

「いやあ、こんな風力じゃあ足に力を込めた僕は飛ばせないよ」

少年は手を上げて叫ぶ。

「可愛い女の子達を倒しちゃうのは気が引けるけど、しょうがないよね!」

すると少年がいつのまにかエレナの後ろに回り腰を蹴りつける。

「あうっ!」

「エレナさ……っ!」

サイズが叫ぼうとした瞬間に回し蹴りを腹に入れられて吹っ飛ぶ。

「いやあ、もつとギアあげちゃうよっ!」

少年は見えなくなり地面に着地したエレナの襟首を掴んで放り投げ、飛んでいるサイズに真っ白な銃弾を浴びせる。

「こんなものっ!」

サイズが水の盾を創り防ごうとすると、盾を避けて銃弾はサイズに向かって来る。

「魔法で銃弾の軌道を変えるなんて僕には造作もないんだよ〜」

少年は自慢げに言いながら空中にいるエレナにも銃弾を浴びせようとする。

「いやあ、サイズちゃんに風に加護をつけておいてよかったわ」

少年がそう呟いたエレナの言葉を聞いてサイズのほうを振り返ると、目の前には巨大な鎌が迫っていた。

「ジ・エンドですね軽薄さん」

鎌が少年を真つ二つにする。血が盛大に噴き出し鮮血がサイズの頬にかかる。

「今度こそコンビ勝利ですね!! エレナさん!!」

サイズが振り返りエレナを見ると、エレナはにこつと笑う。

「そうね……いやっ! 後ろよサイズちゃん!!」

サイズが振り返るとそこにはピンピンしている少年が死体の上に立っていた。

「いやあ、今までの僕の姿をした人は実は魔法人形だったんだよ、騙して悪かったねお嬢さん」

乾いた音が続き銃弾がサイズに打ち込まれ続ける。

「ガードを壊すまで打ち続けるよ!!」

「うわあああっ!!!」

サイズは叫びながらどさつと地面にうつ伏せになるようなかたちで倒れこむ。

「ふうっ! 固かったね結構」

少年がため息をついて拳銃をくるっと回してホルスターに入れているとサイズの倒れこんだところの雪がみるみる赤くなってゆく。

「け、軽薄野郎おおお!!!」

エレナが怒り狂い両手を思いつき振り上げると、少年がものすごい勢いで空高く吹き飛ぶ。

「うわお! こんなに飛んだのは初めてかもね……ん?」

浮かびながら少年が下を見ると鎌やらナイフや刀が下からものすごい速さで飛んでくる。

「うっん、結構これは危ないね」

そういいながら手を魔法で硬くして武器を弾くが、弾ききれずに体に突き刺さる。

「ぐはっ……本体はやっぱり効くね」

口からごぼごぼ血を流しながら少年は呟く。

「ぺしゃんこになりなさい!!!」

エレナが叫ぶと、上から風が吹いてきて少年は物凄い速さで地面

に落下する。

「うわお……このまま落下スピードが速まると死んじゃうかな、こ  
こは……」

「来いトリック！」

少年が叫ぶと同じ姿の少年が現れて少年を空中で蹴り飛ばす。

「ふうつトリックは死んじゃうと思うけどなんとか助かった」

少年がため息をついていると真下にエレナが仁王立ちして待ち構  
えていた。

「あれ！？ なんであそこに？」

巨大な槍がエレナの横にふわふわと浮いている。

「えっ！ あれはたしか青い髪の子の魔法！？」

驚いてサイズのほうを見ると腹から血が盛大に出ているがなんと  
か立っている。

「や……やっちゃって下さいエレナさん」

「行くわよー！！」

巨大な槍が物凄いスピードで少年に迫ってゆき突き刺さる。

「ぐっ……串刺しか、けっこつむごいね……」

少年はそんなことを言いながら消えた。

「大丈夫！？ サイズちゃん！？」

そういいながらエレナはサイズの傷口に触れて銃弾を取り出す。

「大丈夫か！？ サイズ？」

「トライが駆け寄ってくる。」

「大丈夫だよトライ君……ちょっとゆっくりしてれば治るよ。今水  
で体の材料創ったし……」

「そうか？ 無理はするなよ……今止血してやる」

「トライは優しくサイズに言い、自分の服を破きサイズの傷口に押  
し当てる。」

「もう、私は心配じゃないの……」

エレナが隅のほうでふてくされている。にこっと笑いながらトラ  
イは言う。

「エレナなら大丈夫だと信じていたんだぞ！」

「本当かしら？」

にやにやししながらエレナは言う。意外と嬉しそうだ。

「立てるか？ サイズ？」

「うん」

サイズの手をとりたたせてやる。後ろでエレナが怖い顔をしている。

「いやあ、まさか第二試験も突破されるなんてね」

また男の声が聞こえてきて、チエツク柄の扉が現れた。

「まあ入っちゃってよ」

男の声に導かれ三人は扉の中に入った。

そこはもとの砂漠で、ちっぽけな家はなくなっていた。

「まま、そこに座っちゃってよ」

見るとなぜか砂漠の真ん中にソファーがありそこに男が座っている。

「今はサイズもエレナも疲れているし、座ろう」

「うん」

「そうね」

三人は男の正面にあるソファーにどっかと座り込む。

「よくここまで来たね」

三人は何も言わずに座っている……沈黙が続く。

「さあ、お話を始めようか」

男が話し出す。

## 第七話影は動き出す

男は顔を曇らせ少し悩んだ素振りを見せて叫ぶ

「君達合格！！」

「は？」

「え？」

「はい？」

もちろんいきなり脈絡のないことを言われて三人は困惑する。

「いやあ、あんなめんどくさい試験をするのには最初からわけがあつたということさ」

状況を把握できない三人に男は話し始める。

「実は僕は今ね、わけあつて王に追われてるんだよねえ 力のある付き人がいたら役に立つと思つてね……だからあんな面倒くさい試験をしたわけ」

「だからこんな面倒くさいことをしたのか……それにしても、王つて誰だ？」

トライは好奇心が抑えきれずにわくわくしながら返答を待つ。

「ファントムゴッド部隊の王だよ」

「それはホントかつ！！？」

「本当なの！？」

トライとエレナがソファから身を乗り出す。

「ホントだよ」 まあそうエキサイティングしないで聞きなよ」

男が2人をなだめていると、サイズが不思議な顔をしてトライ達に聞く。

「あれ？ トライ君たちはファントムゴッドに何か用でもあるんですか？」

「そついえばまだ何も言つてなかつたな……どうするエレナ？ 教えるか？」

「そうねえ……これからも一緒に旅しようっていうなら聞かせてあげてもいいわよサイズちゃん」

エレナが悪戯っぽく笑うとサイズは目をキラキラと輝かせながら迫ってきた。

「是非是非！ 聞かせてください！」

「わかったよサイズ……でも」

「しょうがないわねえ！　そこまで聞きたいのなら聞かせてあげるわ！」

トライの言葉を無視してエレナはにこにこしながら叫んでいる。

ああ……相当人に言いたかつたんだな。

「なんの話しだい？ 僕にも聞かせてくれないかい？」

いつのまにか男もソファから身を乗り出していた。

「なんとトライはねえ……神を倒す旅をしているのよ……！」

沈黙………

「ぶっはっははあはあはあはあ……！！！！！」

「はあ。トライ君は目標が高いですねえ………」

男は大笑いしサイズは半ば呆れている。

「きつみは本当に……志が高いのは立派だけど、無理だね無理無理」

「僕もこればかりは倒せるとは言いきれませんねえ………なんといつてもあの数々の武勇伝を打ち立ててきた神ですから」

「それはわかつてるわよ。でもトライはやるわよね？」

エレナが聞くとトライはそれがこの旅の目的だからなと言った。

「いやあゝ　こんな子供が存在しているとは思わなかったよ、僕でさえ敵わないあの神に戦いを挑もうと思ってるなんて………」

男がまだ笑い続けているとさすがにむっとしたのかトライが立ち上がるうとするが……立ち上がれない。

「ほゝらね　もう動けないじゃないか」

男がくすくすと笑う。横を見るとエレナやサイズもソファから立ち上がれていない。

「みんなに何をしたんだ!？」  
トライが叫ぶ。

「いやね、ちよおお〜と君に僕との実力差をわからせたいのと、  
彼らの相手は傷を負ってない僕の役目だと思ってるね」  
「彼ら?」

トライが聞くと男はトライを無視し後ろを向き叫ぶ。  
「君達い! 出てきたほうが身のためだよ」そこ全部重力魔法で  
陥没させるよ」

男がそういうとなにもない砂漠にいきなり砂漠なのに真っ黒な口  
ーブを着ている黒髪の青年と対照的な真っ白なローブを着た白髪の  
女性が現れた。

「ん〜やっぱばれたか! ま、あの人の弟だもんな」

「そんなこと言ってる暇はありません。あの男は只者ではありません  
んよ」

2人が遠くで話していると男が叫ぶ。

「やや! その透き通る様な白い肌の君は……たしかヴァイスちゃ  
んだね」

「ちゃんづけはやめてください……鳥肌が立ちます」

ヴァイスと呼ばれた女性は両腕で肩を抱くようなポーズをとる。

「軽薄はあの2人と知り合いなの?」

エレナが興味深そうに聞くと男は歯を見せてにっこりと笑う。

「知り合いつて程でもないかな〜でも名前は覚えているよ」

男はそういつた後少し遠い目をする。

「なあ! 俺の事はわかるか!？」

青年が男に向かって叫ぶと男はしばらく考える素振りをした後……

「ごめんね〜女の子しか僕名前は覚えなないんだ〜」

「そうか……」

青年はしょんぼりと肩を落とす。

「嘘嘘 その黒い肌が印象的だね……シュヴァルツ君でしょ?」

男がにこにこしながら言うつと青年はぱつと顔を輝かせる。

「おお！ 覚えてたか！」

男は一人で叫んでいると、ヴァイスが肩を叩き囁く。

「喜んでいる中水を差すのは悪いと思うのですがシュヴァルツさん

……まずは任務ですよ」

「そうだったな……弟さん！ 悪いけど捕まってくんねえか？」

「駄目〜」

男がそう言いながら指を弾くと2人は別方向に跳躍……一拍遅れて地面が陥没する。

「シュヴァルツさん。これは多分重力攻撃ですね……」

「わかった！ ヴァイス……俺に捕まれ！」

シュヴァルツがヴァイスが伸ばした腕を取る。

「軽薄さんはこんなときどうするの？」

サイズが男に聞く。

「んー 範囲攻撃しちやおっかな」

男がぐつと拳を握ると見渡す限りの砂が一気に陥没する。周りは見渡す限り底のない穴ばかりになった。

「な!!?」

「……すごいわね」

「……すごいですね」

三人はそれぞれ驚いている。すると空中に先ほどの2人が現れる。「いやあ、砂漠が穴だらけになっちゃったなヴァイス」

「呑気なこといってないで、ここは退きますよシュヴァルツさん……ボスに報告です」

「へいへい……ということですかいなら〜!!」

シュヴァルツはヴァイスの手をとるとバチツつという音とともに消えてしまった。すると三人を縛っていた重力がなくなる。

「元気な隊長さん達だね〜 ヴァイスちゃんとシュヴァルツ君大きくなっただな〜」

「あんたはあいつらが誰だか知っているのか？」

トライが聞くと男はうんと言い頷く。

「あの人たちはファントムゴッドの隊長格の人たちだよ ああみえて2人とも13部隊のうち一部隊ずつ率いてるんだよ」

「ああ見えてけっこう偉い人たちなのね」

エレナが少し驚いた顔をして男に言う。

「そうなんだよ まあそれより……君達僕の旅のお供になつてくれないかな……ダメ？」

男が首を少し傾げながら右手を三人の顔の前にはげひらひらさせる。

「答えによつては君達は周りの砂漠みたいになつてもらつちゃうよ

」

その場の空気がピンと張りつめる。男はへらへら笑っている。

「それは脅しですか軽薄さん」

サイズが男を睨みつける。男は何も言わずまだへらへらと笑っている。

「力に屈するのはいやよ。違う手がかりでも探すわ……あなたを倒してね」

エレナが静かにそう言うと男はトライの方を見る。

「脅迫するなら俺はついてはいかない。この答えは変わらない」

トライが男にそう告げると、男は真剣な顔になる。

「はあ……君達反抗期かい？僕についてくると言えばここで死ななくても良かったのに……」

男が手をあげると三人はまた動けなくなる。

「こんなことはしたくなかったけど」

男がエレナに近づく。男はエレナの前に行くとトライの方を見て唇の端を吊り上げる。

「トライ君……もし断つちゃうならこの子……死ぬよ」

エレナの目が恐怖で見開かれる。

「やめろっ……」

トライが叫ぶが男は相変わらずにこにこしながら右手を上げる。

「え？言っちゃえば済む話だよ。一緒にいかせてくださいって……ね。」

男はそう言うと愉快そうに笑う。

「トライ君……どうするの？ エレナさん死んじゃうかもしれないんだよ……」

サイズが心配そうな顔をしてトライに聞く。

「トライ……力に屈しちゃダメよ！ 私はいいから……」

エレナがにこつとトライにむかって笑う。

「どうするんだい。僕にも時間はないんだよ。」

男が手を振り下ろそうとする……！！

「俺は……」

手が止まる。男がトライを見つめる。

「俺は……俺は……エイナを守りたい……だから！」

トライが叫ぼうとすると男が指を弾く。

「っ！！！」

トライはそこで口が動かなくなる。男はにっこりと笑う。

「はい。これで本当の合格……！！」

三人はみんなまたぽかんとする。

「まだわかんないのかい！？ だ〜か〜ら〜今までののは全部僕の演技なんだって〜」

それを聞くと三人は段々と目に見えるほど顔が赤くなる。

「もしかして遊んでたのか！？」

「本当に怖かったのよ……！！？」

「心臓に悪いですよ……！！」

三人が口々に叫ぶのを聞いて男はいきなり笑い出す。

「はははははっ！！ 反応を見ていて本当におもしろかったよ。もつと続けたかったけど少し哀想だからね。」

そう男が言っ指を鳴らすと砂漠の穴が全て復元される。

「これでよしっ。でさあ……君達僕と一緒に……ごはっ！」

男が言い終える前にトライに殴られた。

「あんなことをした罰だ」

トライがそう言うつと男は酷いなあ〜と言いながら頬をさする。

「まあまあ、結構おもしろかったし」

「おもしろかった……ですつて〜!?!?」

エレナが鬼の形相で男に歩み寄る。

「エレナさん……僕も加勢しますよ……」

サイズがエレナの隣に並ぶ。

「え!?!? あの〜……もしかしてあれはしないよ……ね?」

男は後ろに少し後ずさる。

『こんのお……バカー!?!?!?!』

エレナとサイズは利き腕で思いつきり男をブン殴った。

男は吹っ飛んだ。

年が立っていた。

『じゃあ双子って設定にするかい？』

双子は同時に言う。ヴァイスとシュヴァルツはどっちも話をやめてまじまじと双子を見つめる。

「リクエストに答えてくれてありがとうな！ リベルテ」

「ありがとうございますリベルテさん」

2人がにこにこしながらお礼を言う。

『別にいいよ。それより本当に許可がでたわけ？ 嘘じゃないよね？』

嬉しいのか双子の声は弾んでいる。

「こんなところで嘘つくわけないじゃないかリベルテ。あの人の弟さんを生け捕りにするって指令だ」

「貴方なら大丈夫だと思います……なんせあの方女好きですから」

双子はそれを聞くと満足そうに頷く。

『じゃあ、女性になってみるから、シュヴァルツ……評価してくれない？』

「おう！ まかせろい！」

シュヴァルツがそう言った途端海の上には黒スーツを着た秘書のような女性が立っていた。

「シュヴァルツ。これどう？」

リベルテは眼鏡を片手でクイツと持ち上げる。

「うーん、黒スーツに眼鏡で胸がでかいか……ナイスだなりベルテ。だがもう少し胸は小さく」

「貧乳好きですか……」

「殺すぞ色白女……」

「否定しないんですか。可哀想に……」

「俺はロリコンじゃない……本当だ」

「誰もロリコンとは言ってませんよ。墓穴掘りましたね」

2人が話し合っていると秘書がコホンと咳をして2人がそつちを見る  
「無駄話はいつものことだけど今日は長いね。シュヴァルツ……こ

れでどう?」

「んー……もう少し大きいほうが……」

「シュヴァルツさん! 私達には任務があるのですよ!」

ヴァイスが一喝するとシュヴァルツは苦い顔をしてヴァイスの手を握る。

「ではリベルテさん。お願いしますね」

「報告楽しみにしてるぜリベルテ!」

それだけ言っただけでバチっという音とともに2人は消えてしまった。

「まずは人探しからですね。彼らになりますか……」

リベルテが呟くと海の上には秘書ではなく2人の男の子が立っていた。

「なあ、ウーノ。千里眼頼む」

ウーノと呼ばれた少年はこくっとうなづくと目の前に羊皮紙が現れる。

「あの人の弟……エリクシはどこにいるかわかるか?」

ウーノがまた頷くと羽ペンが出てきて空中にある羊皮紙にエンドタウン周辺と書かれる。

「もうちょっとしぼれないか?」

少年がそう言っただけで羊皮紙に砂漠と書き込まれる。

「ありがとウーノ。エンドタウン周辺の砂漠といたらさびさびだな……」

少年がそう呟くと海の上には2人ではなく白い髭をはやした老人が立っていた。

「では、いくかの……」

バチッと言う音とともに老人は消えた。

第七話 影は動き出す (後書き)

## 第八話リベルテ襲来

「いやあ君たちは手加減と言うものをしらないのかい？」

頬をさすりながら男が呟く。エレナとサイズは二人揃って無視する。

「ねえトライ君。この2人に僕となかよくしてくれるように言ってくれないかい？」

男は対応がよくわからずトライに助けを求めるが、トライも無視する。

「まったく……旅のお供が何もはなさいとつまらないのだが」

「わかったわ。別に話はしてあげてもいいけど、ああいう心臓に悪いことをするのはやめてよね」

ずっとへこまれると旅が開始できないので渋々エレナが口を開く。

「わかったよ もうしないから安心して」

男は妙にひきつった笑いを浮かべながら言う。あきらかに約束を破る眼だ。

「それより軽薄さん。私が町などに行つたとき軽薄軽薄言っている」と私と貴方が変な目で見られてしまうので、名前を教えてください」

「そうだな……<男>とか<青年>って呼ぶのも変だしな」

「私もそれがいいと思うわ。名前もわからない人と旅をするのもなんか変だし」

そう言われると男はまっぴりしてましたとでもいうようにえっへんと胸を張る。実は自己紹介したくてしかたがなかったんだなとトライは思った。

「僕の名前はエリクシ。重力系の魔法を使うよ」

「ん！？ エリクシ。魔法は火、水、雷、土、風の五種類しかないはずだが？」

「さっそく呼び捨てか君は まあ一般的にはそうだとされているけど、実際は違うんだな」

どう違うの？とエレナが聞くと、エリクシは少し声をひそめる。

「実はね、神は魔法を訓練しそれをアレンジして、新しく＜創世の魔法＞を作ったんだよ」

『創世の魔法！！？』

エレナとサイズの声が重なる。エリクシは2人の反応を見てすごく満足したようで、意気揚々と話し出す。

「神の＜創世の魔法＞は新しい種類の魔法を作り出す魔法で、僕みたいな重力魔法や、転移魔法や、空間魔法なんかがあるんだよ」

「ん？ でもその魔法の習得方法がなんで俺達に知らされてないんだ？」

トライが質問する。

「じゃあトライ君。強い魔法を民に教えてその教えられた民が更に民に教えていくと……どうなると思う？」

トライはしばらく考えるそぶりをし、指をパチンと鳴らす。

「民が強い魔法を持ち、その強い魔法を持っている集団の中からリーダーが生まれ、国が出来上がる」

「正解 だから神がその＜創世の魔法＞で創った魔法を与えるのは、ファントムゴッドの隊長とリトルゴッドだけなんだよ」

周囲からほくっという声が漏れる。

「ん？ じゃあ重力魔法を持つエリクシさんは昔は神の下で働いていたんですか？」

サイズが聞くとにこにこ笑っているエリクシの表情が少しだけ曇る。

「まあ……ね、ちょっとしたいざござがあつたのさ それより、追っ手がもう来ちゃったよ」

エリクシがそう言いながら砂漠の彼方を指差す。そこには人影は見当たらない。

「誰もいないじゃないの！」

エレナがそう言うとエリクシはちゅちゅと指を左右に振りながらエレナに囁く。

「いるじゃないか……さそりが」

「は？」

「だからさそりが追っ手なんだって」

エレナが哀しい人を見るような眼でエリクシを見るが、エリクシは気にせず言う。

「さそりさん……いや、リベルテ。もうばれちゃってるから出てきていいよ」

エリクシがそう言った途端砂漠にいきなり黒スーツに眼鏡をかけた女が現れる。

「やっぱりばれてましたかエリクシさん。まあ想定の内です」  
女はそう呟きうんうんと一人で頷いている。

「エリクシ……あいつは誰だ？」

「リベルテっていうく物で、なんにでも変身できて、変身した姿一つ一つが別々の能力を持っているんだよ」

エリクシはへらへらと笑いつつも険しい表情をしている。

「うん、そんな能力があったなんて……世界は広いですね」

「感心してる場合じゃないわよサイズちゃん。私達そんな化け物と今から戦うのよ」

エレナがそう言うのとリベルテがいきなりこっちに向かって走り出す。

「三人は散らばって攻撃のチャンスがあったら魔法攻撃をしてねなんてったって僕が今回はメインだからね」

エリクシは緊張感のない声で指示を出す、三人は一斉に別々の方向に向かって走り出す。

「知っていると思いますが、エリクシさん……貴方を捕まえるためにここへ来ました！」

リベルテはそう叫びながら懐から果物ナイフを取り出し投げつける。

「君の能力は……超身体能力だね？ たしか動体視力が活発になるっていう」

エリクシがナイフを手で弾きながらそう呟くとリベルテは意外そうな顔をする。

「それがどうしたんですか？ エリクシさん！」

リベルテが叫びながら足払いをすると、エリクシは紙切れのように舞う。リベルテは空中に舞うエリクシを下から足で突き上げる。

「はっ！」

リベルテは気合をいれながら空中で身動きが取れないエリクシに思いつきリアッパーをくわわす。殴られてエリクシは上空にいくが、全然平気そうな顔をしている。

「ん〜、やっぱり体術だと相手にはならないよね〜……魔法使っちゃうか」

そう呟いた途端リベルテの動きが止まる。エリクシは地面にすたと着地して、身動きのとれないリベルテに打撃を与え続ける。

「ほらほら〜 そのまんまの姿だと体ぼろぼろになっちゃうよ〜」

エリクシの拳は速すぎてリベルテが何発くらっているのかわからない。

「やれやれですね……その程度で私を倒そうなんて片腹痛いですよ」  
リベルテが呟くとそこにはいたはずのリベルテがいなくなり、はるか彼方に老人が立っている。

「我輩がお相手しよう」

老人がそう言った途端エリクシの背後に老人が立っている。老人は日本刀のようなものを取りだして凄まじい速さで斬り付けるが、エリクシはなんとかわかず。

「ひゅ〜 転移能力なんて見たのの初めてだよ〜」

「減らず口を……」

老人は横からエリクシを斬ろうとする。エリクシは軽くバク転をしてかわすが、バク転の着地点から少し離れたところに老人が立っており刀を抜く。

「わお、そんなのアリ!？」

なんとか二撃目をバックステップでかわすがバックステップで着

地する前に老人が目の前に転移してきて刀を縦に振る。

「転移して間合いに入り避けたとしても避けている間に転移して間合いに入り攻撃する……反則だよねソレ！」

エリクシがそう叫んだ途端老人は刀を振るのをやめて少し後ろに転移する。転移した瞬間にさっきまで老人がいたところにナイフやら鎌やらがざくざくと突き刺さる。

「惜しい！ はずれちゃったよエレナさん！」

「大丈夫よ！ 次ははずさないわー！！」

エリクシが声のしたほうを見ると、サイズとエレナがエリクシに向かってぐつとピースサインをする。

「ふう、貸し作っちゃったな ま、今を生きぬければいいか」

エリクシが勝ち誇ったようににこつと笑う。

「ばれたかの……まあ問題ないわい」

老人がそう言った途端そこには老人ではなくドクロの仮面を被り黒マントで体を覆う男が現れた。

「何するかはわかんないけど……ここいらでとどめささせてもらうよー 三人ともいくよ」

「OKです！」

「派手にいくか〜！」

「コンビワザですね。ドキドキします」

三人が返事をする。トライが腕から黒い火柱を放ち、エレナが風をおこしその炎を強くする。サイズが巨大な爆弾を作りだしエリクシが重力操作でそれをリベルテのほうへ飛ばす！！

「いやあ、いくら君でもこれじゃあ死ぬでしょ」

エリクシがそう言った途端ドクロの男を黒い火柱が貫き巨大な爆弾が爆発する。凄まじい爆発音がして、砂がもうもうとあがる。

「これで……終わったか？」

「……私は倒せない」

爆弾の爆心地には、ほとんど無傷といってもいいような状態のドクロ仮面が立っていた。四人は少しの間呆然とする。

「タフだね」

エリクシはなんとかそう言ったものの、額に冷や汗が流れる。

「これが私の最強変身……魔法を無効化する魔法だヨ」

男はさくつさくつと砂を足で掻き分けこちらに歩みよってくる。

「なら、これでどう?!?!」

サイズが水で作ったナイフを投げつけるが、ドクロ仮面に当たった瞬間ただの水に戻る。

「無駄だヨ。無駄無駄。それは魔法で作った武器だろウ？」

「ってことは、肉弾戦で勝つしかないってことか？」

トライが言うと、ドクロ仮面はマントのしたから黒刀を二つ取り出す。

「まあそういうことだけド、君たちには無理だろウ」

トライは炎魔を抜き、エリクシは懐から二丁拳銃を取り出し片方ずつエレナとサイズに渡し、自分はどこにしまっていたのか、斧を取り出す。

「やってみなきゃわからないだろう？」

「そうよ。なんてたって4対1よ」

「もう君死刑確定だね」

ドクロ仮面はくっくくくくと笑うとどす黒いオーラがどろりと流れる。

「おもしろいヨ。君たち本当におもしろイ」

トライとエリクシがドクロ仮面に接近し、トライが足を狙い斬りつけようとするが黒刀に弾かれ、体制を崩したところに追撃が来るが、エリクシが斧を下から振り上げて弾き、体制を崩したドクロ仮面にエレナとサイズが銃弾を打ち込む。ドクロ仮面はとっさに黒刀を使い銃弾を防ぐ。エレナとサイズは銃弾を打ち続け、注意をそらす。エリクシは銃弾を防いでいるドクロ仮面の隙をつき背後に回リ上から斧を振り下ろそうとするが、ドクロ仮面はすぐさま振り返りそれを受け止め、軽く跳躍し四人から距離を置く。

「ん〜おもしろイ。久しぶりだよこんなにおもしろい戦いハ」

ドクロ仮面はそう言いながらケラケラと笑い出す。

「ん、もう卑怯とか言ってられないね 調子こいたあのドクロが悪い」

エリクシがそういいながら懐から機関銃を取り出す。

「どこにそんな質量のものを隠せるスペースがあつたの？」

「細かい事は気にしない気にしない」

そう言いながらエリクシは機関銃をドクロ仮面に向かって打ち込む。ガガガガガと銃弾が雨あられのようにドクロ仮面に降り注ぐが、ドクロ仮面は驚いたことに全部避け当たりそうになつたものはギリギリ黒刀で全部弾く。

「ヒユウ どんな動体視力だよ」

エリクシはそう呟きながらガガガガと銃弾をあめあられのように浴びせる。

「無駄無駄無駄だヨ。私には銃弾は効かないヨ」

「どうかしら？」

ドクロ仮面が一瞬声のしたほうを振り向くと、エレナがいて拳銃を構えている。

「二方向からはすくしきついネ」

ドクロ仮面はそういいながら黒刀の側面も使い二方向からの銃弾を弾く。機関銃の弾が切れる。エリクシは切れちゃった と言いなから機関銃を投げ捨てる。

「おやおヤ。弾切れかい？」

ドクロ仮面がそう言いケラケラ笑つた瞬間黒刀を上へ振り上げる。ギインという音とともにトライの炎魔が弾かれる。

「甘いヨ。銃弾に意識を集中させて上から攻撃なんて……ひっかかるわけないじゃないカ」

ドクロ仮面が勝ち誇つたように笑う。パンっという音がして笑っているドクロ仮面の頭に銃弾が打ち込まれる。

「エ？」

トライが何事かとあたりを見渡すと、遠くに拳銃を構えているサ

イズが見えた。

「コレは予想してなかった？」

サイズがにこつと微笑む。だが、ドクロ仮面はすつくと起き上がる。

「色々聞きたい事があるけど、なんで生きているの？」

エレナが聞くとドクロ仮面はマントを脱ぐ。そこには先程の老人がいた。

「ここまでおいつめたのだから教えてしんぜよう。銃弾が打ち込まれて仮面を貫通する瞬間にこの姿になったのだ」

「ようするに、縮んだから銃弾はあたらなかったってこと？」

サイズがそう言うと老人は頷く。

「だが、こんなに楽しい戦いは久方ぶりじゃった。今日はひきあげるとしよう」

老人はそう言うと消えてしまった。

「ま、命拾いしたから結果オーライだね」

エリクシがそう言うと、三人は糸が切れたかのようにぱたっと倒れこんだ。

「ふう、楽しい旅になりそうだ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8103c/>

---

神への挑戦

2010年10月15日17時55分発行